



無知学は知の野望を後押しはしない

塚原, 東吾

(Citation)

化学, 79(8):54-55

(Issue Date)

2024-08-01

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本記事は出版社の許諾を得て公開しております。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495791>



無知学は知の野望を 後押しはしない

塚原 東吾

神戸大学大学院国際文化学研究科

これまで4回の連載では、無知学の枠組みの大枠を紹介してみた。無知学の基本的なキーワードの説明になっていたのではないかと考えている。おさらいを試みるなら、「無知を問題化すること」、「資源となる無知」、「無知の分類」、「つくられる無知」や「有徳な無知」などを散りばめてみた。

ここから数回は、無知学という名が招きやすい誤解や、悪質な無知の例とそれに対する無知学からの対処法などについて論じておきたい。

無知学は無知をなくす？

よく誤解されるのは、「無知」を研究しているという点、その無知を新たな知識で埋め尽くすために研究をしていると受けとられてしまうことである。確かに、無知が特定されることで科学研究の対象になる。それが無知学の始まりで見いだされた「無知には価値がある」という見方だ。では、無知の多くは、なんらかの手法でなくなっていくほうがよい。もしくは

無知の部分がなくなる「はず」だと考えられるのだろうか。知の地図上の空白は、すべて勇気ある冒険家や知的な探検家の記述で覆い尽くされる「べき」だと想定してよいのだろうか。

無知学は、無知をうまく探しだして、システムティックに無知をなくしていくための学問の枠組みであると考えられるならば、それは違うだろう。このような想定は「無知学は無知をなくすための研究の一環である」という解釈に由来するものである。無知学は知の世界の「テラ・インコグニタ(未踏の地・未知の世界)の征服」を目標とするための補助的なアプローチだと考えられるのなら、そうではないといっておかないといけない。

無知学への誤った期待

無知学にテラ・インコグニタを征服するための戦略の立案役、つまり参謀としての役割を期待するのは誤解であるし、誤った期待でもある。ましてや科学的に奉仕するために哲学的知を供する道具でもない。

もちろん、この期待は、ある程度のところまで正しいことは認めざるをえない。無知は、科学者の特定した「未知」の問題として再発見される性質のものであるから、「無知は資源」と考えるやり方と相性がよい。

だが、そのような考え方だと、すべての無知は未知だと解釈されて、それらの地・知は踏破し尽くされて、地図上の空白はそのうちなくなる。人類の知的な探究は止まることを知らないし、宇宙の機構や現象のことごとくは解明されるはずである。

これは「人類の知の野望」とでも呼べるような、壮大な想定に基づくものでもある。科学史上、このような想定の良い例が、18世紀にニュートン的な世界観が万能だと信じていた数学者のあいだに見られる。彼らはこの宇宙のすべての分子や原子の位置と時間、質量や運動量、そういった力学的な要素のすべてが判明するならば、それでこれから起こることは、微分方程式を解くことで、何でも予測できるという仮説を立てていたのである。これはいわゆる「ラプラスの悪魔」と呼ばれる、知的な因果解析による合理主義的な決定論である。だがこれは量子力学、とくにハイゼンベルクの不確定性原理によって完全に否定されている。いうまでもなく、素粒子の位置と速度は同時に決定できないから、そのような決定論は、原理的に成り立たないことになる。だがそれでも科学者の想定としては、因果関係の万能論や知的な決定論を信

じたいという傾向がいまだに強く見られる。

無知学はその方向に少しは貢献するかもしれないし、そのような側面も、無知学自体の一つであることは確かだ。現代科学を進めるために協力的なポジショニングは、無知学もある程度は維持できるし、そのようなかたちでの貢献も可能だと思うが、基本のところでは無理がある。

科学の視野を広げるため

しかし、無知学は必ずしもそのポジションからの貢献だけを目指すものではない。また、無知をなくすることが無知学の究極の目標かといわれるなら、それは違う。むしろ知の問題というのは、無知の問題でもあるということを示すことを通じて、現代の科学的実践に向けて、ある種の考え方や視野の拡大を導こうとするものである。つまり、科学の実践について既存の見方を変えてみる、もしくは知識生産のスタイルについて分析の枠組みの視点を別のところにとってみて、より大きな視野から考え直してみようと提唱する立場だ。無知学は、科学的実践についての思想的な相対化や哲学的な観点の導入を試みている。

冷めた目で野望を見つめる

このような「テラ・インコグニタの征服」という壮大な野望を否定するのはここでの無知学の役割ではない、それはハイゼンベルクに任せておこう。知の野望をとくに否定しなかったとしても、そこ



無知学は、テラ・インコグニタ (未踏の地、未知の世界) を征服するような、無知を知で埋めていくためのアプローチなのか…？

出典：国土地理院ウェブサイト (<https://kochizu.gsi.go.jp/items/144>).

では野望をもった者たちのために能吏として仕えるというより、どちらかという少し横から野望を見直すようにアドバイスすることが無知学の役割だ。つまり無知学は、「そういう野望をもっているキミは何をしたいのだい？」とか、「それでどこに行くのかなあ」などと、ちょっと問いかけて物語を進

行させるような、ある種の狂言まわしが向いている。いわば舞台の行く末を見極めつつ科学の進行それ自体は妨げない、シェイクスピア劇の宮廷道化に与えられた役割だとも思える。そう考えるなら無知学の立場は、やはり現代科学にとってのソクラテス的な問答役である。

つかはら・とうご ● 神戸大学大学院国際文化学研究科教授、1987年東京学芸大学大学院修士課程修了、1993年医学博士 (Ph.D., オランダ・ライデン大学)、＜研究テーマ＞科学史、科学哲学、STS (蘭学、化学史、気候再現など)、＜趣味＞プラタモリと孤独のグルメを合わせたような感じで行ったことのない街を歩くこと、淡水魚の水中観察